

「庚申さん」への信仰

上小川の庚申塔

安曇川町上小川の藤樹神社の境内に、市の有形文化財に指定される石造庚申塔があります。船型の石板の表面には「見ざる 言わざる 聞かざる」の3猿が彫り出され、その様式等から江戸時代に造られたものと考えられています。

日本に広まった庚申信仰

庚申塔とは、中国から伝来した道教に由来する庚申信仰に基づいて建てられた石塔のことで、庚申塚とも呼ばれます。

庚申信仰では、60日ごとに巡ってくる庚申(かのえさる)の日の夜



上小川の石造庚申塔

は、人の体内に「三尸さんし」という虫が、人が眠るのを待って、体内から抜け出して天に昇り、天帝にその人の罪を告げるので、告げられた人は早死にをすると考えられます。このため長生きをするためには、庚申の日の夜は、眠らないで身を慎むことが必要とされました。

日本では、平安時代に貴族の間でこの信仰が広まり、室町時代になると次第に一般の人々の間でも、庚申の日に仲間とともに徹夜で勤行をしたり飲食をしたりする庚申講の行事が行われるようになっていきました。なお、庚申塔は、その庚申講を3年18回続けて行った記念や供養のために建てら

れるもので、村の境界近くなどによく置かれました。

市内の庚申塔

道教の教えに由来する庚申信仰

は、日本では仏教や神道にも関係する民間信仰として人々の間に広まったため、その信仰の対象は、仏教的な考えでは青面金剛しょうめんこんごう、神道的な考えでは猿田彦神であるとされました。このため、庚申塔の石形や彫られる仏像、神像、文字などはさまざまで、市内でも種類の違ういくつかの庚申塔が見られます。

新旭町針江の日吉神社の前には、自然石に「庚申」の文字が彫られた石塔が建っています。また、今津町保坂の旧街道沿いにも庚申塚と呼ばれる自然石が残っています。



針江の庚申石塔

庚申講の変化

『新旭町誌(昭和60年刊行)』には、庚申の日には庚申講の講員が集まって、酒、餅、小豆飯、精進料理などを「庚申さん」に供え、入浴して身を清めて勤行等を行い、その後は飲食と雑談で眠らずに時を過ごしたという風習が紹介されています。こうした庚申講の行事は、市内各地で行われていたと思われませんが、近年はさまざま事情で、行事が縮小されることが多いようです。

図文化財課

(25)8559

編集感

皆さん「幸せの青い鳥」って呼ばれている鳥を知っていますか？

私も最近まで知らなかったのですが、「オオルリ」という瑠璃色の小鳥もそう呼ばれています。

自然豊かな高島には沢山の野鳥が生息・飛来しており、公式Instagram「たかP写真館」で紹介していきたいと思っておりますので、ぜひご覧ください。(Y)



広報たかしま

令和4年

6

月号

No.269

発行▼高島市

編集▼政策部企画広報課

〒500-8501

滋賀県高島市新旭町北畑5の10番地

☎0740(25)8000(代)

http://www.city.takashima.lg.jp
t-info@city.takashima.lg.jp